

森吉山麓高原自然再生事業 現地調査及び意見交換会 概要

9月2日に自然再生専門家委員、関係省庁、森吉山麓高原自然再生協議会、自然再生事業実施者の参加の下、秋田市内で開催した意見交換会にて行われた森吉山麓高原自然再生事業実施計画に関する出席者からの主な質問及び意見は以下の通り。

○表土を剥ぎ取って植栽をしていると現地で聞いたが事実かどうか。

国内において、開放地的な景観が減ってきている。開放地が自然の遷移の段階でできることによって、鳥類や昆虫等の多様性を育んでいるということは考えられるのではないかと。それを保全することも、一つの方向性になりうるだろう。

→（実施者）土壌耕耘を行うにあたり表土を一旦剥ぎ取って、剥ぎ取った土も含めて耕耘している。全面耕起にしたのは、部分的に水が貯まらないよう排水性と通水性を保つためである。ただし、全面耕起の有無で比較した結果、排水性等に差がなかったため、現在は全面耕起していない。

2点目について、協議会の中でも同様の意見があり、草地として維持する部分を設定している。

○今議論のあったブナの全面移植が難しいとなったときに、次に草地として維持していく場所について今後どのようにしていくかという議論も重要であり、先進的な事例として他地域でも活用できるモデルとして計画に盛り込んではどうか。

伐採前から残っているブナ林の利活用及びそこにある文化等の活用を検討してはどうか。自然再生を始めた経緯も、計画本文に記載してはどうか。文化的な部分も環境教育の際に伝えられるだろう。

→（実施者）この地域の歴史の中で牧場開発を行った経緯としては、当時林内放牧が東北のブナ林地帯において広範囲で行われたことから、ノロ川周辺でも牧場地に転用されたとのこと。標高約1,400mの森吉山頂部では、放牧のために使っていた石垣等が残っていて、地元では保全する方向で様々な動きがあり、観察会が行われたりもしている。

○昆虫類や哺乳類などの生物の種組成が、この事業を通してどのように変わってきているのか、モニタリングすると良いだろう。また資料には、虫害や鼠害とあるが、こういった種が害を及ぼしているか等をもっと具体的に把握してはどうか。

○百年、千年先を考えて、あえて人の手を加えず放置するという考え方もあるだろう。放

置といっても、モニタリングを重視するという意味である。人間が特定の生物だけ保全しようとする、必ずアンバランスになってしまう。こういった状況を踏まえて環境省、農林水産省、国土交通省は、それぞれの立場でどうすればよいか、考えて頂きたい。戦後投下した社会資本整備の維持管理だけでも費用がかかる中、守るべき自然は買い取り、放置をして森林をつくるべきではないか。

→（実施者）放置の考えは賛成だが、この事業を始めた理由の一つとしてチシマザサからの防護対策としての植林もある。侵入種であるチシマザサは侵入スピードが速く、覆われてしまうと数百年の単位で自然の遷移が進まないと言われている。島がある程度形成してきたら、その後はできるだけ自然の遷移に委ねる考えである。

○本州ではクマゲラはブナの極相林にしかいないと言われているが、一方で北海道では、そのほとんどがトドマツやエゾマツの極相林、一部は人工林に営巣が確認されている。クマゲラの餌は主に腐った大木の樹洞にいるムネアカオオアリである。木が育ってクマゲラに役に立つのは百年後よりももっと後になってしまうのではないか。その間、クマゲラはこの場所ではなく周辺の国有林に生息するだろう。ブナ林が大事なのか極相林が大事なのか。クマゲラの繁殖を考えたときには、ブナをそこまで強く意識する必要はないのではないか。木によって樹齢は様々で早く腐るものもあるので、その周辺の国有林にも頼りながらブナ林の混じった混交林で考えていけば、目標を十分達成できるだろう。また、長いスパンで見ると混交林がブナ林化していくだろう。

あと、ポット苗は根が丸まってダメと分かっているの、裸苗かコンテナ苗で植えないとせっかく植えた木が枯れてしまうので、改良した方がよい。

○資料の中の「事業対象地の変遷」という航空写真において、対象地外の一部に草地が森林化しているように見える箇所がある。ここの状況はどうなっているか。昭和55年から約35年で手付かずでいたならば、放置する場合の将来像がどうなるかの参考になる。

説明資料には時系列ごとにブナ林が再生していくイラストがあるが、この中にクマゲラや人間、その他生物も描かれるとよいだろう。この事業を通して、ブナ以外の生物の生態系サービスがどのように再生されていくかのイメージを共有できれば良いだろう。

→（実施者）指摘の航空写真の場所は、国有林のスギの造林地である。縁はブナの母樹が残っている状態でスギの不成績化が進み、スギと広葉樹の針広混交林を形成している。樹高は10～20mである。

○協議会に多様な主体に参画してもらうためにも、もっと広域的な視点を持つことが必要。周辺の森林等を含めたエコロジカルネットワークの観点、歴史的な観点を盛り込んだ計画にすればより良い計画になるだろう。

テクニカルな面では、耕起で水が溜まってしまうという話があったが、雨が降ったとき

の物理的な水文流出過程の視点も重要ではないか。

クマゲラはシンボルとなっているが、大学の生徒や多様な研究者を入れることで、どれだけクマゲラの生息数を確保できるかといったことに興味を持つ人も増えて重厚な協議会の取組になるのではないか。多様な主体の参画について現状と今後の展望を聞きたい。

→（実施者）秋田県立大学や秋田大学の先生方から指導を受けながら、事業を続けている。クマゲラに関しては、この一帯での生息情報が入っており、多様な研究者も入っている。森吉山麓高原は、研究者や学生の研究フィールドとして活用されている。また、ボランティア団体や経済団体、東京の団体等による植林などの活動の場としても活用されている。

○EUの自然再生のキーワードは、*passive restoration*。人がでしゃばらない自然再生がひとつの重要と捉えている。自然に逆らわないため成功が保障されるとともにコストがあまりかからないメリットがある。この様な方法で進める拠点としてはどうか。草原は森の中のギャップで、研究者がしっかり見ていることや土地が公有化されていることなど、そのための条件は整っていると考える。また、ブナ林がどのように増えていくかシミュレーションできると思われ、植樹の意味を説明しやすくなるのではないか。自然の推移を感覚でわかる人が増えていかないと今後の自然再生事業を進めていくのは難しいので、自然の目を養うモニタリングと自然環境教育が一体となった誰もが楽しめるプログラムを提供することが重要である。このようなモニタリングのプログラムに参加した人からすれば、自分たちの調べた記録がデータとしてずっと残れば、社会的意義を感じられるだろう。

実施者

現状抱えている悩みとして、アクセスの悪さがある。公共交通機関がなく、また雪の影響等もあり、限られた期間しか山の中に入れない。こうした問題について他の協議会で、良い知恵があれば紹介頂きたい。

○三方五湖の自然再生協議会では、外来種対策などテーマを決めた体験ツアーを企画して人を集めていた。旅行会社とタイアップをして企画したらどうか。

○直接関与してはしないが小笠原諸島の国有林では、外来種のアカギの駆除に、一般の人がボランティアで来てくれるが、それは有名な小笠原諸島だから来る。ブナの魅力を伝えるためにも、PRは大事だろう。

関係省庁

長野県ではミヤマシジミを保護するNPOと企業が協定を結び活動を支援している取組

があり、参考となる。

実施者

白神山地での保全活動には東京から人が来ているが、世界自然遺産ということでネームバリューが大きい。クマゲラを全面にPRすれば人は集まるが、巣の写真を撮りに人が押しかけ、クマゲラが逃げってしまうという問題がある。

○場所が良くないというのはわかるが、農家民泊などに取り組んでいるか。

→（実施者）ダムを設置による集落移転があったため、地域住民とのつながりが希薄になっている。近隣にあるのは国民宿舎から発展した宿舎が10km離れたところにあるのと杣温泉に20人ほどの宿泊施設があるのみである。現場の小さなキャンプ場を活用したプログラムがあるが、なかなか人が集まらない。地元企業と連携してできるだけ参加者を広げていきたい戦略はあるが、更なる拡大が難しい。

→○文化的な面でそういった集落移転の経緯なども計画書に書いていただいた方がよい。

事務局

本日の意見交換の概要をとりまとめ、実施計画についての助言の有無を検討したうえで、次回の自然再生専門家会議で提示して議論いただく考え。

以上